

---

# 正当な狂氣

紗華

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

正当な狂氣

### 【著者名】

紗華

N3552D

### 【あらすじ】

あの日の出来事は僕のすべてを壊した…そして僕は狂うことを選択した。

## 暗い部屋で…

僕は、薄暗い部屋の中で氣絶している2人の前に立っている…。

薄暗い部屋の中にはPCが動作する音が響き、  
PCモニターの明かりは僕の顔を照らし、鏡の中の顔は凄く不気味  
に写っている…。

氣絶していた1人が、驚いた感じで目を開けた。そして…もがいて  
いる。

そうだ…僕が氣絶している2人の手足を縛つて、口をガムテープで  
塞いだんだ。

目を醒ました1人は、状況を理解できないみたいだ。

キヨロキヨロしている。

僕と目が合った…しかし無視…。

僕はPCの前に座り、作業を始めた。

カタカタ…カタカタ…。

キーボードを打つ音が、PCの動作音と混じって響く…。

作業に没頭し、いつのまにか数時間経っていた…

もう、外は真っ暗で薄暗かつた部屋はPCモニターの明かりだけになっていた。

作業が一段落し、僕はまた2人の前に立った。

1人は氣絶したまま…

目を醒ました1人は、ずっと僕を睨みつけていた。

さすがに数時間経っているので、自分の状況は理解できるみたい

だ。

でも、どうしてこんな田にあつのかは解つてないだろ?……。  
ずっと僕を睨みつけている……。

僕はそんな睨みを横目に部屋を出た。そして別の部屋にある引き出  
しから、写真を一枚取り出し、2人が居る部屋に戻った。

部屋に戻ると、もがきながら必死に動き逃げようとする姿があつた。  
そして僕に気付くとやつぱり睨んでくる。

僕は取つて来た写真を、そつと見せた……。

僕は自分の行為が犯罪だと解つてます……でも、あの日から僕は狂  
つてます……そう、あの日から……

僕は、目を醒ましてる1人にスタンガンを押し当て、引き金を弾いた……。

## 失った日…

あの日…決して忘れる事のできない昔の出来事…

あの頃の僕には7歳上の妻と子供が一人居た。  
若くして結婚した僕は裕福とは言えなかつたが、とにかく仕事に没頭し、次の年に中古の一軒家を購入するのが決まり、少しずつ自分の人生に幸せを感じていた。

あの日…17年前の11月4日は妻の34歳の誕生日だった。  
あの日、僕は朝から出張で地方を駆け回っていた。とにかく今日中に仕事を終わらせ、家に帰るつもりで……。

当初、出張は妻の誕生日の翌日までの予定だった。  
その事で出張に行く前日、妻と言い争いをし、喧嘩したまま僕は出張に出掛けることになった。

僕達の夫婦喧嘩は日頃からよくあつた。  
しかし、それは意識してお互い些細な事で言い争いをするようにし、  
よりお互いが解りあえるようにする為。

ちょっとムカついたら……お互い溜め込まずに、言いたい放題。  
気分が落ち着いたら……どちらからでもなくお互いが謝る  
喧嘩する…すぐに仲直り。

それが僕達の夫婦円満の秘訣だった。

そんな感じで日頃から夫婦喧嘩慣れしてる僕だったので、出張初日の昼には妻に謝罪のメールを送つていた。

それからすぐに妻からの謝罪のメールが届き、初日の仕事が終わる頃には、前日の喧嘩の怒りも完全に消えていた。

そして出張先で妻のことを想いつ……。

ある気持ちが強くなる。

「誕生日と一緒に祝うことは出来ないか?」

僕は出張の予定を見直し、時間は遅くなるが妻の誕生日に帰れるよう預定を作り直した。

少し妻を驚かしてやるつと、誕生日に帰るのは前日まで黙っていることにし、出張先の花屋に無理を言い、バラ34本の花束と

「一日早いけどHAPPY BIRTHDAY!」

「明日、遅くなるけど帰るよ」

と書いたメッセージカードを、11月3日に家に届くようお願いした。

11月3日になり、取引先との商談中に電話が鳴る。  
妻からだった。

商談中だったので着信をすぐに停止させ、携帯をマナーモードにした。

その後も何度もバイブで着信しているのは解ったが、商談中なので無視していた。

商談が終わり、携帯の着信履歴を見てみると計7件あった。全部、妻からだった。

ずっと無視していたので怒っているのを覚悟して、妻に電話した。

電話に出た妻は怒ってるどころか、花束に喜んでいた。そして

「明日、帰つて来れるの?」

と、嬉しそうに聞いてきた。

「うん、遅くなるけど帰れるようになった」

「ただ、明日までずっと商談があつてプレゼントが用意できない、ゴメン」

と僕。

そうしたら妻が

「プレゼントなんてどうでもいいよ。花束だつて貰つてゐるしね」と言つた。

そして電話を切つた後、妻がプレゼントを気にしないと言つてくれたので、とにかく仕事に集中することとした。

妻の誕生日：11月4日になつた。

僕は朝から駆け回り、仕事を予定より早く終わらせ、新幹線に飛び乗り帰路についた。

新幹線の中では妻に電話して

「少し早く帰れそうだよ、せっかくだから今日の夜は外食に行つて、前に欲しいと言つてたバッグと一緒に買いに行こう」と僕は言つた。

嬉しそうに

「了解！」

と、妻は一言。

そうして電話を切ろうとした時、重大な事に気付いた。

金がない…僕の財布の中にはあと7千円しかなく、とてもバッグなんか買えない。

僕は妻に、ATMで金を下ろしてくるように頼んだ。そして電話切つた。

新幹線の中で僕はウトウトしていた。今回の出張は、結構ハードな予定を更にハードな予定に変えたから、疲れが出たのだろう。ウトウトしてゐる内にいつの間にか寝てた……。

なにやらアナウンスが聞こえる。  
「次の駅は……です。」ハツーと氣付くと降りる駅を2駅も過ぎている。

「しました、寝過ぎ」した

僕はすぐに飛び起き、次の駅で反対行きの新幹線に乗り換えた。

「あー、なんて馬鹿なんだろ?」

僕自身を責めてみるが、意味がない。結局、帰る時間は遅くなってしまった。

妻にメールで寝過ぎした事を送った。しかし、なかなか返事が来ない。僕があまりに馬鹿過ぎて呆れてるのかな?

電話をしてみた。

あれ?……出ない。

ひょっとして怒ってるのかな?

確かに今から帰つてバッグを買いに行くにも、店は閉まっている。

やっと本来降りるべき駅に着いた。

もう外は日が暮れて真っ暗。しかも激しく雨が降っている。

新幹線の中では妻に何度も電話をしているが、やっぱり出ない。

ちょっと気になる

雨も降つてるので、僕は駅から普段は使ひ事のないタクシーで急いで家に向かった。

駅から家まで約20分。普段はそんなに遠くないと思っていたが、今日は遠い。

家の前に着いた。  
部屋に明かりがついてない。

駐車場に妻の車がない。

家に入る前に、家に誰も居ない事が確認できた。

「ただいま

小声で言いながら僕は家に入った。

やっぱり誰も居ない。

妻に電話してみる……。

「電源が入っていないか、電波が届きません」

何処に行つてるんだ??

僕は誰も居ない部屋で妻の帰りを待つた。

誰も居ない部屋……外の激しくなつてきた雨音が 韶く……

8

……急に電話のベルが鳴る……

「はい」

僕は電話に出た

声の低い男がゆっくり喋りだす

「警察ですが、桜山公園の駐車場に停まっていた車の中から、奥様とお子様とみられる遺体が見つかりました。確認してもらいたいので、署まで来て下さい」

……僕はこの時にすべてを失った……

## 妻と子供…

警察から電話が来た30分後、僕は警察署の前に居た。人違いに決まっている……心中でそう思っていた。

警察署に入り、受付に名前を告げる。奥の部屋から出てきた男が、僕を警察署の奥に案内する。

「あの～、本当にうちの妻と子供なんですか？」  
案内されながら尋ねた。

「一応、所持品の中に免許証があり顔写真も一致してますので…残念ながら、間違いないと思います。」  
と、深刻そうに男が言った。

9

深刻そうな男の顔を見て、本当に妻かもしれないと急に気持ちが焦りだした。

「どうして死んだんですか？」

僕は尋ねる。

「まだ詳しいことは言えません」  
男は僕から目を逸らして言った。

靈安室に着いた…中に入る…ベッドが一つ並んでいる…白い布を被

せられた人が寝かされている……。

「確認をお願いします」

男がそう言しながら、布をめくった。

妻と子供

確かに妻と子供だった。

目を開じてまるで眠っているようだった。

「どうですか？奥さんとお子様に間違いありませんか？」

男が尋ねてくる。

「はい、間違いありません…」

声を震わせながら答えた…

しばらく沈黙が続いた…

なぜ…なぜだ…どうして…何故なんだ…なぜ…どうして…

「どうして妻達は死んだんですか？」

わたくしの質問をまた男に聞いた。

今度は答えが返ってきた。

「まだ断定できませんが、警察ではなんらかの事件に巻き込まれ殺されたと考えております」

淡々と男は答えた。

「……殺された！？……犯人は？」

僕は強い口調で男に問い合わせた。

「まだ捜査中でして……お子様はナイフによる刺殺だと想うのですが、奥様は死因や凶器なども特定できていない状態なんです」やつぱり男は淡々と答えた。

「それで……」男が続けて言つ。

「それで……死因や凶器を特定する為、奥様とお子様の遺体を司法解剖させて頂きたいのです。」「

……殺され、そして遺体も切り裂かれる……

そんなことアーテンなんか求めず、警察で勝手にやつて黙つてくれればよかつたのに……。

凄く最悪な気分だ……愛する妻と子供が切り裂かれるのを了承しなければならないなんて……。

僕は妻達が切り裂かれるのを了承をした。

靈安室から部屋を移り、警察から色々と聞かれ、いろんな手続きを

し、そして妻達の遺体が見つかった時の状況を聞かされた。

妻が見つかった状況……

営業の合間に休憩しようとした営業マン……

普段は人気の少ない夕方の桜山公園駐車場……

ドシャ降りの中で窓を開けたままの駐車車両…

気になつた営業マンが覗いてみた…

車の助手席に子供が横たわつてゐる…

後部座席には…裸の女が横たわつていた…

…発見された時の状況…聞かない方がよかつた…

…妻は裸で発見された…

妻になにがあつたか…最悪な想像が頭の中を駆け巡る…強姦…

…妻と子供を警察署に残し、家に帰る…誰もいない家に…。

家に着く頃には日付も変わつていた。そして…妻の誕生日は…妻と子供の命日になつていた…。

## 朝から電話…

…電話が鳴る…

…その音で目が覚める…

…「タツで寝てる僕…

そうだった…昨夜は夜中に帰つてきて、何か考え事をしてゐる間に寝てしまつたんだ。

…まだ頭がボ・ツとしている…

昨日の出来事を思ひ出さない様に時間が止まればいいの……。

僕しか居ない部屋に、ずっと電話が鳴り続けている…。

面倒だが電話に出てみた。

僕が受話器を上げると同時に興奮した声で…

「もしもしし、どうこいつ事? テレビで言つてるのは娘じゃなにわよね?」

妻の母親からだつた。

その言葉で辛い現実に引き戻される。

「娘じゃないわよね?」

本当にそうだつたら良かつたのに…

興奮する妻の母親に事件の説明をする。

「テレビで娘は裸で発見されたと語つたけど、本当なの?」

また思い出したくない事実を認識せられる。

「はい、そうみたいですね。子供の方は刺殺みたいなんですが、妻の方はまだ死因が解つてないそうです」「他人口調で妻の母親に答える。

「な……なんでこんな事になるの……」

電話の向こうで泣いてるのが解つた。

「もしもし……」

電話の向こうの声が、少し低く太い声に変わった。妻の父親の声だ。  
「もしもし、テレビで言つてるのは本当みたいだな。事件に巻き込まれたのは君のせいじゃない。だから君を責めるつもりはない。だが、なんで事件が解つた時点で一報もないんだ?…普通、こっちに連絡するのが常識じゃないか?君も大人だろ。それぐらいわかるだろ?…」

最初は穏やかな口調だった妻の父親が、途中から怒り気味の口調に変え僕に訴え始めた

僕だってそれぐらいの常識は持つている。しかし夜中に電話する事も、非常識な事だと思っている。

「すいませんでした。また何か解つたらお知らせします。」

妻の父親に少しムカつき、そう言つて電話を切つた。

電話のお陰で完全に目が覚めた。

時計を見てみると、まだ6時半…ようやく外が明るくなり始めていた。

目が覚めても、なにをすればいいのか分からない…

ふと、さつきの妻の母親の言葉を思いだす…

…テレビで言つていた…

もう昨夜の事件はニュースになつてゐるのか?  
すぐにテレビの電源を入れる…。

朝のニュースがやつている。

しかし、昨日の事件はどのチャンネルでも言わない。

くだらない地域の話題、今日の占い、そして天気予報…どのチャンネルも似たような内容で6時台のニュースは終わった。

7時になつた…どのチャンネルも番組の雰囲気が変わる。  
そしてキャスターがニュースを読み始める…。

「昨夜、午後6時半頃 県 市の桜山公園の駐車場で……。

「昨夜の事件だ…

「……なお女性は裸で見つかり……」

わざわざ妻が裸で見つかった事を、強調して言つてる様な気がした。  
少しの間、昨夜の事件のニュースをチャンネルを変えながら見ていた。どの局のニュースも似たような事を言つていた。  
ニュースが中盤のくだらない話題になつてきた頃、また電話がなつた。

今度は昨日の商談相手からだ。

「…もしもし、おはようございます。」

僕は電話に出た。

「もしもし、昨日はあつがといひやれこました。昨日の取引の件ですが……」

相手は昨夜の事件を何も知らないふりで、仕事の話をずっとしている。

「…それで少しでも早い方がいいと想いまして、本日貴社に伺いたいのですが、どうでしょ?」

えつー?会社?…そうだ仕事を完璧に忘れてた。

本来ならもう家を出てる時間だ。

「すこません、今日からしばらく休むつもりなので…。会社の者からひかり電話で連絡させますので…」

そつと電話を切り、すぐに会社の上司に電話をした。

「もしもし、おはようございます。あの~すいませんが妻と子供が死んだので今田から少し休みます。」

そう上司に言つた。

すると

「休むのか?いいぞ。ただ嘘をつくならもつと考えてつけ。嫁さんと子供、一度に殺したら次は誰を殺すんだ?」

と笑いながら上司から返ってきた。

上司は冗談だと思ってるらしい…普段の僕を見てればじょうがない。

僕は少し深刻そうな声で

「いえ、本当なんです。それで当分休みますので…」

上司に休むのと、取引先の件を伝えて電話を切った。そしてまたテレビを見始めた…

7時台の番組が終わり、8時台……ワイドショーが始まった。

「全裸母子殺人…公園駐車場で発見!…」

そつテロップで大きく出た。

事件の起きた公園の駐車場をバックに、レポーターが歩きながら事件を説明している。

そして

「なぜ、このような事件が起こってしまったのでしょうか?」

の言葉を最後に場面はスタジオに移った…。

スタジオではコメンテーターが

「最近は物騒になってきましたね。裸で見つかった被害者に何が起こったのか?とにかく早く犯人が捕まることを願っています」

他のチャンネルに変えてみると、同じようなワイドショーが3局でやっている……事件について、どの局のキャスター、コメンテーターも深刻そうな顔で同じようなコメントしか言わない。テロップには視聴者が興味を示しそうな言葉…

僕には深刻そうな顔をして、楽しそうに事件を報道してゐる感じがした…。

また電話が鳴る。

今度は警察からだ。

「一応、検死が終わりました。遺体の引き取りと少し伺いたいことがありますので、署に来てもらえますか」

僕は出掛ける準備をする為、洗面所に向かった。

昨夜は気がつかなかつたが、台所に花束が飾つてあつた。僕が送つたバラだ。

洗面所の前に立ち、鏡を見る……僕の顔は無表情だった。

昨夜から顔も洗わずに居た。もつとひどい顔をしてると思つていたが……無表情だつた。

頬に涙の跡もなく……無表情の顔だつた。

## 警察署にて…

…警察署に着いた。

家を出て、此処に着くまで大変だった…。

家を出たとたんに、マスコミ関係者が待ち伏せしていて、いきなりのインタビュー…。

「今回の事件について一言お願いします」

マイクを突き付け無理矢理コメントを求める。

何も答えないままマスコミの前を通り越した。  
携帯にも何回か着信があった。

会社から…通夜と葬儀はいつやるのか?  
妻の親から…詳しいことわかつた?  
友人から…事件は本当?

警察から…早く来て下さい。

周りの人々がうつとうしく感じた…

警察署に入り、昨夜と同じく受付で名前を告げる。  
昨夜とは違つ刑事が現れ、僕を奥に案内した。

奥の部屋に入り、刑事がゆっくり喋りだす…

「え~検死の結果、死因が解りました。それでちょっとお聞きした

いのですが……」

そう言いながら立ち上がり、奥にある机の上に置いてあつた青いファイルを持ってきた。

そしてファイルを見ながら、

「あの～奥さんなんですが、心臓になにか病気とかありましたか？」

突然、変なコトを聞かれ

「えっ？ 心臓ですか？」

僕は刑事に聞き直した。

刑事は

「そうです。心臓です。過去に手術したとか弱つかったとか、奥さんから聞いたことがありますんか？」

ともう一度聞いてきた。

僕は変な質問に頭を傾げながら、過去を思い出す。

… そういうえば、妻本人から聞いたことはなかつたが、結婚して間もない頃に妻の母親から、妻が小学生の頃、心臓が弱くて運動が出来なかつたと聞いた事があつた…。

そしてその事を刑事に話した。

刑事は納得した表情で話しだした。

「これでこっちも納得しました。それでは検死の結果をお伝えします。まずお子様ですが、当初の見解どおりナイフによる刺殺で間違はありませんでした。それで奥様なんですが、目立つた外傷はなく

我々警察の方でも、死因がなかなか解らなかつたのですが、首と胸部に火傷みたいな小さな跡がありまして…、それがスタンガンによるものと判断し、死因としてはそのスタンガンによるショック死とみてます」

…スタンガン?  
…ショック死?

頭の中が混乱した。

刑事は続けて話す

「あと、事件の状況を話せる範囲で話します。今回、車の中や事件現場で争つた跡もないでの、犯人は最初にスタンガンにて奥さんを氣絶させ、それから衣服を脱がしたと考えられます。一旦、奥さんの意識が戻つてしまい、犯人はもう一度気絶させようと胸部にスタンガンを押し当て作動させたと思われます。そして、その時のショックによって奥さんは死亡したと思われます。お子さんについては、奥さんと同じくスタンガンで気絶させられ、そのあとナイフで刺されたと考えられます。」

…なんとなく事件の状況が頭に浮かんだ…

部屋のドアが急にバタンッと開いた。

そして別の刑事が部屋に入つてきた… 昨夜の刑事だ。そして軽く会釈して話します…

「え… 昨夜はどうも…。ここからは私が話しますね。」

昨日とは違う軽い口調だ。

…死因や簡単な事件の状況は、もうお聞きしたと思います。

今回の事件は激しい雨の為に、事件現場の状態が悪く、捜査がやりにくい状況です。犯人に繋がる物証も見つかってませんし、車の中にも何も残つてません。」

まだ事件の捜査が全く進んでないらしい…。

刑事は一度部屋を出て、ビニールに入ったバッグを持つてきた。

「奥様の所持品のバッグです。無くなってる物がないか確認をお願いします」

… そう言って僕の前にバッグを置いた…。

確かに妻が普段使っているバッグだ。

僕はバッグを開けて、中身を確認した。

… まず財布。中身は1万7千円。あと免許証とカード類。いつもの財布の中身と変わらない。

… 次にポーチ。化粧道具が入っている。これもいつもと変わらない。

… そして銀行の封筒。中身を確認すると、7万円入っている。たぶん妻が銀行から引き出した金だろう。

特に盗られた物はなさそうだった。  
刑事にそのことを告げる。

刑事は解っていた様子で

「やっぱり何も盗られてないようですね…。所持品に荒らされた形跡がなかつたので確認をお願いしました。

これで警察としても、物盗り目的での犯行の可能性が少ないと判断し、暴行目的の犯行と怨恨による犯行の2点に絞つて捜査ができるま

す。」

… 怨恨？

妻は人に怨まれるような人間ではない。

するとい、やっぱり暴行目的なのか？

：暴行目的…そして殺害…。

僕の中に、まだ見ぬ犯人に憎しみという感情が湧いてきた…。

刑事は

「…事件の一連の流れと話せる範囲の情報は以上です。ご協力ありがとうございます、その時はご協力お願いします。」

そう言つと部屋を出て行った。

刑事と入れ替えて女性警官が入ってきた。

「こちらが遺体と遺留品の引き取りの手続きの書類になります。この欄にご記入お願ひします。」

女性警官は書類を僕の前に置き、書類を指差しながら説明した。

：めんどくさい…

そう思いながら、書類を記入する。

：11月4日…妻の誕生日を記入。

30分位で書類に記入が終わつた。

すべての手続きが終わり部屋を出る。

さつきの刑事が小走りで僕の前に駆け寄つて来た…そして

「さつき言い忘れたんでお伝えしておきます。検死の結果で、奥さんの体から体液は発見されてないです。良かったですね」と、言つてきた。

…えつ？

突然で意味が解らなかつた。

理解してない僕の顔を見てもう一度、  
「つまり、奥さんは犯人に姦られてないって事です。警察としては  
犯人の体液があつた方が捜査しやすいですが…」

…そりか…妻は姦られてない…でもそれがなんなんだろ？…殺され  
た事実は変わらない…

僕は一言、  
「…はあ、そうですか…」  
と漏らした。

刑事は、  
「…あれ？驚かないんですか？」  
と不思議そうに僕の顔を見た。  
そして時計を気にしながら最後に  
「奥さん、姦られてなくて良かつたですね」  
と笑顔で言つて小走りで居なくなつた。

刑事が言つた…  
「良かつた」…といふ言葉…  
なにが…  
「良かつた」…のだろう？

本当にそつ思つているなら、あの刑事はバカだ…

僕は警察署を後にし、通夜と葬儀の準備の為、走り回った。.

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3552d/>

---

正当な狂気

2011年1月12日15時30分発行